

12世紀、パリのサン・ヴィクトル修道院は、学問、靈性のセンターとして多くの学者神秘家、詩人が活躍した。そのなかに、すぐれたセクエンツィア集を残して音楽史上にも名を残すアダンがいる。

アダン（カトリック大事典および中世思想研究所はアダムと表記している）の来歴については決定的な文書がないようだが1146年パリで没したAdam Precentorといわれるアダンがこのセクエンツィアの作者と現在のところは同定されている。アダンのセクエンツィアは聖歌学でいえば、後期セクエンツィアあるいは第二期セクエンツィアといわれる。後期セクエンツィアはAnalecta Hymnicaの54巻後半から55巻にかけて取められており、これらはアレルヤから離れて非典礼化した、旋律も世俗化する傾向にあるが、アダンのセクエンツィアはイノケンティウス3世によって絶賛されたという。全45曲のなか特にLaudes crucis attollamus（われら十字架を高く賞賛せり）はすぐれたものである。この旋律は曲集中、言葉を変えて10曲あらわれる。そして後にドミニコ会士トマス・アクイナス（1274没）が聖体の大祝日用のセクエンツィアLauda Sion Salvatorem（シオンよ、救い主をたたえよ）に、このアダンのラウダ・クルチスの旋律を用いたために16世紀トリエント公会議で5曲を除いてセクエンツィアが禁止された時にも淘汰から免れ、幸いにもアダンの旋律は20世紀後半まで、教会で歌い継がれることになるのである。この旋律がいかに人気のあったかということはアシジ写本695（13世紀セクエンツィア、トロープス収録）においてもフランシスコの祝日のものをはじめとして、この旋律が繰り返し使われていることから伺える。L'Abbe E. Misset, Pierre Aubryによる"Les proses D'Adam de Saint-Victor--Texte et Musique --"に四線楽譜ですべての楽曲が収録されている。また上智中世思想研究所編の『サン・ヴィクトル学派』中世思想原点集成9（平凡社1996）に平林冬樹によるセクエンツィアの訳が所収されているので、テキスト訳と旋律をあわせてファイルしたものを資料室で作った（内部資料なので閲覧したい方は杉本まで）。

全旋律は16のパターンからなっている。配列は教会暦にしたがっているので、降誕のセクエンツィア、殉教者ステファノのセクエンツィア、と続く。

教会暦にしたがってセクエンツィアのテキストを読み進むと、今の典礼には失われた豊かな美しい表現に出会うことがある。